

Title

植生学の余白と都市の余白

Matthew Gandy(2017), *Natura Urbana: The Brachen of Berlin* (映画作品)

Matthew Gandy(2022), *Natura Urbana: Ecological Constellations in Urban Space*, MIT Press.

Name

木内久美子

ここで紹介するのは、ケンブリッジ大学地理学科教授でドキュメンタリー映画作家でもあるマシュー・ガンディの映画作品と、この作品を貫いている理論的射程を論じた著作である。ガンディはこれまでの著作で一貫して、近代都市における自然と人間活動の産物および人工物の複雑な関係に着目し、人文地理学や都市環境学を軸に、都市に特有のハイブリッドな自然のありかたについて研究してきた。ガンディの映画と著作の両方のタイトルに用いられている「natura urbana (都市の自然)」という表現は、その独自の射程を体現している。

ガンディはその著作において、ベルリン工科大学教授で環境学者のインゴ・コワーリクを参照しながら、「都市の自然」を四つに分類している。(1) 現存する自然環境を喚起するものやその生き残り、(2) 農業や林業において管理されるランドスケープ、(3) 公園や庭園、街路樹のある大通りなど、デザインされた都市部の自然、そして(4) デザインされていない都市部の荒地／雑草の生えた空き地 (urban wilderness)、放置された周縁的な場所、である (Gandy, 2022, 13)。

従来の都市研究は(1)から(3)のいずれか、あるいはその組み合わせとして都市の自然を捉えてきた。このことは「都市」という言葉の履歴とそれが用いられてきたコンテキストを考えてみれば、腑に落ちるものではあるだろう。

例えば英語の「city (都市)」はフランス語の「la cité (自治区)」、さらにはラテン語の「civitas (市民権)」に由来しており、そこには行政区における自治管理の含意がある。また「urban」という語の語源であるラテン語の「urbs (城塞都市)」は、城壁で囲まれた特定の空間を外敵から守るために計画的に建設された場所である。ここにも「city」と同様に、防衛管理や計画といった概念を読み取ることができるだろう。

少し脱線して日本の話をすれば、「都市」という語は明治時代に入ってはじめて使用された語である。翻訳語と見なせるかどうかの議論はさておき、この語はヨーロッパの近代都市のイメージをまともされていた。当時の日本語ではすでに「都府」「都会」「都城」「市街」など別の語が用いられており、「都市」はながらく人口に膾炙しなかった。明治時代後半に入り、都市社会主義者の片山潜の著作『鉄道新論』やA・ショーの著作の翻訳において「都市」という語が多用され、行政においても都市計画の文脈で、この語が徐々に用いられるようになっていった¹。大正

時代には、全国での近代都市計画の実現のため、都市を有機体とみなし、住民をその有機体の一部として位置づけ、一市民としての責任感をもたせる政策（都市有機体論）が展開されるようになった²。この意味で「都市」とは、行政による鳥瞰図的な空間デザインだけではなく、それを実現するための社会のデザイン、つまり市民を動かすイデオロギーを担った言葉でもあった。

管理のための計画を先鋭化させてきた都市計画にとって、自然がその対極に置かれてきたのは当然の成り行きだったのかもしれない。市民の生活の質を確保するため、管理可能な生活インフラや交通網、住宅など整備するためには、既存の自然を根本的に改変するか、一掃するしかなかった。こんなことは人間を中心としたパースペクティブによる世界像のすばらしさを信じることなしには、到底不可能だっただろう。人間によって世界を管理という理想——それは近代化を可能にした。もちろん今日の私たちは、「管理」がする者とされる者を分断し、ときにはされる者の命を奪い、他方管理をする者においてももはやその意思は問題とされず、管理システムが社会や経済を条件づけてきたという、その理想のあとの歴史を生きている。

だが今日の地球で起こっている様々な自然現象は、人間の論理に基づいた人間による人間のための自然管理が、もはや不可能だという事実を私たちに突きつけている。というか、私たちはようやくそのことを受け入れるようになってきた。

もちろんこれに連動して、都市に組み込まれる自然への見方も少しずつだが変わってきてはいる。たとえば公園の植栽として選ばれる樹木にしても、鑑賞用としての価値よりも、土地の風土・気候に馴染んだ種が選ばれるようになってきている。とはいえ、都市の自然を管理の対象とみなし、自然を設計する思想は根強い。(2)や(3)が都市緑化の主流なのは、そのためだろう。

この対極的な考え方として、(1)の発想が高まりを見せている。「ありのままの自然」を希求する動きだ。だが「ありのままの自然」とはなんだろう。人間活動の影響がない自然だろうか。たしかに近代化によって自然は大きく変えられた。だがそれ以前には「ありのままの自然」があっただろうか。あるいは定住と農業以前の狩猟採集時代の自然が「ありのまま」の姿だろうか。人間活動の影響が地層に見える時代にあって、私たちは人間と環境と不可分な関係のみとめざるをえない。この関係を見つめることから、人間が自然とどのように共存していけるのかを考える必要がある。ここで自然と人工の二項対立を乗り越えなければ、この絡まり合いを解きほぐすフレーミングは得られない。

ガンディが着目した(4)はまさにこのようなフレーミングを与えてくれるものだ。映画作品でガンディは、ドイツの近代都市・西ベルリンにおける「社会的な産物としての自然」の営みを、ベルリン工科大学の研究プロジェクトをとおして解き明かしてみせる。

この映画で紹介されているのは、ベルリン工科大学の植物学者ヘルベルト・ズコップを中心とした研究グループによる西ベルリンの植生調査である。この研究グループは、戦後の西ベルリンで多様な植生が見られることに注目し、都市部全域を小さな区画に分け、各区画に生息する植物とその群生のマッピングをおこなった。この調査はそれ以前の植生学とは一線を画するものとなった。

第一にその研究対象となった土地が、第二次世界大戦中に空爆で焼失した市街地や、戦災瓦礫の集積場だったことである。従来の植生研究(そして現在も変わらずその傾向がある)では、その土地に長い期間生息してきた植生(在来種)を調査するために、人為が極力介在してない自然のみを研究対象としていた。この原則には、人為が介在する土地では自然本来の植生の発展(遷移)が起こらないという前提があった。他方、ベルリン工科大学の研究チームは、そこで育まれている植生の多様性を自然とみなした。従来の研究では都市部の植生は多様性に欠けるとして研究対象としてあまり注目されてこなかった。だがベルリンの植生研究によって、都市の自然が生物多様性の点で

農村よりも秀でていることが実証されたのである。

ガンディはこのことを、西ベルリンの歴史に結びつけてみせる。1940年から1945年にかけて連合国軍の爆撃を受け続けたベルリンには約6万8千トンの爆撃用の兵器が投下され、約6400エーカー（26平方キロメートル）が瓦礫と化した。市街地の再建のため、瓦礫は一時的に市の郊外、東部や南部の複数の地域に集積された。例えばグリュネヴァルトにあるトイフェルスベルクでは、2500～2600立方メートルに及ぶ大量の瓦礫が集積され、高さ100メートルほどの丘ができたという。冷戦の硬直化にともない、東ドイツの領土内に位置していたベルリンは東西に分割され、西ベルリンは地政学的に孤立した。これがベルリン市街地の植生の独自性と多様性を生んだとも考えられている。映画のサブタイトルにある「Brachen」（ドイツ語では「休閑地」）はこのような場を指している。瓦礫という人工物の育んだ土壌だからこそ育まれた森を、ベルリン工科大学の研究グループは「自然」とみなし、正当な研究対象とした。

この延長線上で彼らがさらにラディカルだったのは、在来種と外来種という区分にたいする姿勢においてだった。植生学では外来種は在来種を脅かす種とみなされ、在来種が中心に調査されていた。だがさらに厳密に、その土地で1500サイクルを経ている植物のみを在来種と見なすのであれば、爆撃を受けて焼け野原になったベルリンで確認されている植物はすべてが外来種だということになってしまうかもしれない。ベルリン工科大学の研究者たちは、外来種という語よりも、より中立な「neophyte」や「advent species」という語を用いて、外来種を、それぞれが歴史的・文化的な背景をもったベルリンへの「移住者」だとみなした。

ガンディは研究者たちのインタビューをつなぎながら、移住者の比喻を、当時のベルリンの政治状況にも結びつけている。東西に分断され、孤立した西ベルリンには、外国への憧れ、他様性への憧れがあった。それと同時に、東ドイツからの亡命者をあたたかく受け入れてもいた。彼らは自分の住み慣れた土地を離れ、自由を求めてこの土地に越境してくる。彼らがあたたかく迎え入れられている西ベルリンで、外部からやってくる植物をも包摂するような植生学のあらたな視点が切り開かれたのだ。

ガンディの著作では、ベルリンの事例以外にも、ハイブリッドな都市の自然を扱った複数の事例が紹介されている。それらの事例は、思考のフレーミングを変えることで、「管理のための都市計画」というフレーミングでは余白にとどまり可視化されていない都市のアクターを前景化することができるということだ。環境の一部としての人間活動が再考を迫られる今日、都市も環境の一部としてそのあり方を変えることを余儀なくされている。今こそミクロなレベルから余白に蓄えられた都市の豊かさを可視化し、都市「づくり」のありかたを変えていくときだろう。

¹ 丸茂弘幸（1995）「明治期における用語「都市」の使われ方」『都市計画文集』30号，468頁。

² 中川雄大（2021）「都市計画導入期における「都市」概念の普及過程——都市計画当局の実践に対する学習論からの分析——」『社会学評論』72.2, 113-114頁。